



9月号



土おこしがはじまった
畑を耕す子どもの手
不器用な動きだけれど
真剣な目

小っちゃなへちまの苗
どのくらい伸びるんだろっ
どんな花が咲くのかな
どんどん水をやろうよ

すこいや、一階までとどいたよ
黄色い花だよ、ほら、一つ、二つ……
へちまの実がついているよ
どのくらい大きくなるのかな

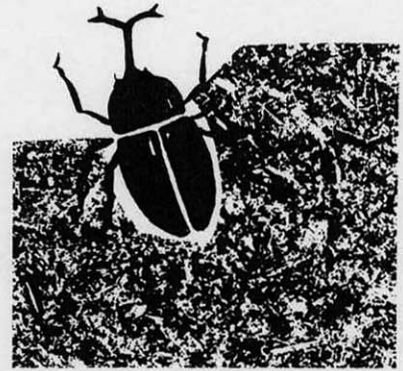
昭和56年9月1日
編集／発行
岡崎市教育委員会

(「へちまの栽培」を通じた体験学習—矢東小)

—教育随想—

ひとを育てるもの

中根 鎮 夫



最近の子どもたちを見てみると、自分が育ってきた頃の様子とあまりにも大きく違っていることに驚くことばかりであります。

私が生まれたのは大正十四年のことですから、社会の仕組みそのものも今とは比べものにならないのですが、それにしても今の子どもたちを取り巻く社会環境や親と子のあり方などには首を傾げたくなることが沢山あります。

私は、旧常盤村（現在岡崎市大柳町）に生まれたのですが、生まれてすぐ祖母の在所である奥殿の中根家に貰われていたのです。養家は、奥殿藩の藩中でしたから、五、六町歩を耕す百姓でした。昔は、百姓に学問はいらないと言われていましたが、これはなまじ学問など身につけると、百姓をきらって、今でいうサラリーマンになって家を飛び出すんじゃないかとという心配があったわけですね。

すから、私の母親も学校の成績が落ちると、機嫌がいいといった具合でした。

こういう事情でしたから、いくら頼んでも旧制中学へあけてやるうとは言ってくれませんでした。そうすると、なんとか進学できないものかと一所懸命に考えるようになるのです。今のように、勉強が第一、それも上の学校へ入るためのいわゆる受験勉強優先の中で、母親に「勉強しなさい、勉強しなさい」と言われていたら、案外進学など考えなかったかもしれません。私のように、学ぶことを抑えつけられると、逆に向学心が燃え上がってくることもあります。

私は結局、岩津農商学校へ進むことを許されて、そこを卒業してから、更に岡崎師範学校へ行くこともできました。今から思うと、母は家の跡取りとして農業に従事してくれることを望みながらも、母親として子どもの能力や希望、将来とい

うようなことを考えてくれていたのではないかと思います。母が、家庭環境や子どもの気持ちを考えて、こうした道を歩ませてくれたことを本当に有難いことだと思えます。

今の親はどちらかと言えば、学歴社会に乗り遅れないためによい高校、よい大学へ行かせよう、金の儲かる職業につかせよう、というように世の中の動きばかりに目を向けてしまい、子どもの能力を客観的に見ようとすると気が足りないうちに思います。子どもを親の物として考えましょう。そこに過保護という親子の関係が生じるわけです。親の方では、物質的にも精神的にも恵まれた親子関係をつくっていくことなのですが、子どもの側から言えば、迷惑至極な場合もあるわけですね。親は恵まれた環境だと思っていなくても、子どもはかえって不幸だと感じている。現代はそういう状況が多いように思います。学校教育の場でも同じようなことがあります。鉄筋化された校舎、充実した設備、備品、快適な学校生活など、恵まれた学校環境であれば、すばらしい人間が育っていくかという、そうばかりではありません。むしろ、全国的には非行の低年齢化などと言われているように、子どもたちの心が蝕まれているのが現状です。こうした状況を救うのは、何よりも先生と子どもとの人間関係を豊かにすることです。ひとりひとりの将来を真剣に考え、子どもの心に愛の楔を打ち込むことだと思います。（岡崎市長）

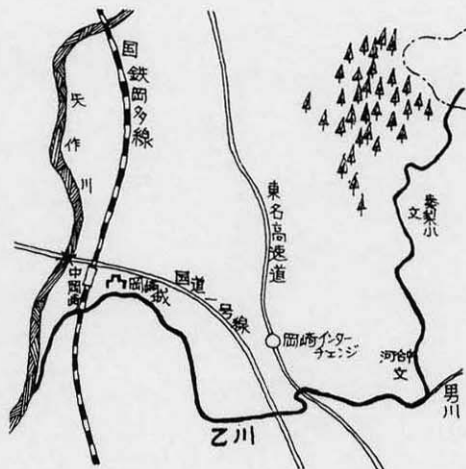
海外こぼれ話



最後の夜

鈴木 裕子

ツアーの一人は、バンクーバー市内でも一きわ目立つホテルを指差すと、「最後の夜は、あのホテルで乾杯しよう」と提案した。即座に意見はまとまり午後七時まで自由行動。以後ホテルのバブ集合になった。おみやげもそこそこ済ませ、途中道に迷い、三十分ほど遅刻して到着。すでにグラス片手に想い出話をはずませる者、音楽に合わせ踊る者、気分はどうやら盛り上がっているようだ。さつそく乾杯。日頃飲み慣れないアルコールも今日ばかりは抵抗なく喉を通る。ふと受付に目をやると、ツアーの仲間数名が困った顔で立っている。ジーンズでは中に入ってくれないのだ。どう頼んでも入口のプロンド美人は首を横に振るばかり。百ドル余分に払うと交渉してみると、やつとオーケーのサインがでた。改めて周囲を見まわすと、なるほど、タキシードや裾の長いドレスを着た紳士、淑女が多く、普段着はどうやら私達だけのようだが、マナーに欠けたかな、とも思ったが、旅



—ふるさとの山河—

乙川

男川学区の南端を西流する乙川は、大平の東にある丸山町と岡町で大きく蛇行している。早瀬をなして流れ下った乙川の水はここに集まり、断崖が高くそそり立つ下に、紺碧の水が底知れぬ深さに渦をまいている。ここは俗に竜宮と呼ばれ、丸山側を雄龍頭、岡側を雌龍頭という。竜宮には数々の伝説が伝えられ、周辺には縄文から古墳時代にかけての遺跡が数多く残っている。

昔、岡に住む鈴木某という者が竜宮の近くで木を切っている最中に誤って斧を水中に落としてしまった。見ると斧はすぐそばにはつきりと見えるので水中へ取りに入ったところ、いつのまにか竜宮へ来てしまった。竜宮の王は珍客にたいそう喜び歓迎した。鈴木某は三日間竜宮に留まり、帰る時に王の頼みにより自分の斧と竜宮の斧を交換した。某は竜宮の斧

を持って帰宅すると、そこでは自分の三回忌の法要を営んでいたということである。そして、竜宮の斧は今でも鈴木某に伝えられているという。

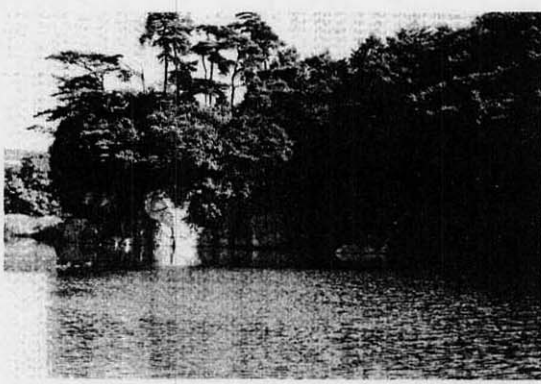
浦島太郎によく似た、この竜宮の斧の話のほかにも、雨乞い伝説やわん借り伝説などがある。

竜宮の北側、村上川と乙川の合流点に近い段丘の上に村上遺跡がある。村上遺跡は、縄文時代の早期からその存在が明らかにされており、中期の堅穴式住居跡が残されている。この地は洪積台地の端にあたり、南に乙川、北に山地をひかえ飲料水や食料を得やすかったため、早くから人類の生活が営まれたのであろう。

また、このあたりは市の古墳群地帯の一つであり、村上遺跡にある村上古墳をはじめ神明古墳、経ヶ峰古墳などがある。時代は下り明治になると、新政府の富

国強兵、殖産興業の大方針による産業の指導と育成の一環として、綿紡績業奨励のため国立の模範工場が広島と岡崎の大平に設置された。この官営愛知紡績所の跡は、現在日本高分子管の工場になっているが、当時の建物や排水口などが残っている。この地に官営工場が設置された理由の一つとして、乙川の水があげられる。当時、岡崎付近は三河木綿の産地であり、原料が得やすく、乙川は水量もあり、原料としての大型水車を回すにふさわしい土地であった。水車を回すための水は、先程から述べている竜宮のあたりから取り入れられ、その水路は今でも丸山町などに残っている。

このように、乙川は大昔から人々の生活に深くかかわってきたのである。



車優先

杉浦富士雄

パンコックの炎暑の中、車がけたたましい音をたてて走っていきます。かつて日本で走っていた角ハンドルのミニ三輪車がタクシー用に改造されて、現役として立派に働いていました。目の前を十年程前のもかと思われるような中古車がドッドドッドという排気音をあとに走り抜けていきます。バイクもかなり多く、これがまた騒音をいつそう激しくしていきます。

交通信号、道路標識はほとんどありません。メインストリートでも信号といえ、子どもが交通教室で使うようなスタンド式なのが四本立っているだけです。車本来の機能である速く走ることが優先されていて、スピードはだせるだけだして走り、人の横断は車の切れ目を見て走って渡ります。

車検がないのでどんなに古い車でも動く間は走り続けます。私の車も古いけれど、パンコックではまだ新品の部類に入るのはないかと思ひ、意を強くしました。無免許運転、バスなどの無賃乗車もかなりあるらしい。こんな状況にありながら日本より交通事故が少ないと聞いて二度びっくりしました。

(細川小)

月報「岡崎の教育」百号記念特集

この100か月

昭和四十八年六月に月報「岡崎の教育」が創刊されて以来、この九月で百号を迎えた。

ここに、産みのころの思い出、知られざる編集の苦勞話、百号までに掲載された主な岡崎の教育のあゆみ、さらに月報の内容をまとめた索引などを中心として百号記念特集とした。

――創刊のころのお話を聞かせてください。

●「教育月報」という形のもので、それまでもありました。それは、児童生徒の作品やお知らせ、記録といったものが主な内容でした。

今度つくるものは、市内の小、中学校の先生を対象とし、何らかの教育的意味を持つものとして期待され、相互に刺戟し得るものでありたいと願いました。岡崎の教育がそれによって高まるものでありたいと、誰もが念願したものです。

――編集の構えとか内容についてはどうでしたか。

●一頁の写真は、市内の小中、東西南北の平均をねらいつつ、常に季節感のあふれた新鮮なものを心掛けました。教育随想に登場する方々は、教育界の先輩や広義の先覚者を求め

て政治的色彩は除くようにしました。

●編集の姿勢としては、できるだけ多くの人に執筆してもらおう努力をしましたが、初期においては思うにまかせませんでした。でも、継続してこそ意味を持つものと考えて、いろいろ知恵をしばりました。

――そのころの編集の様子をお聞かせください。

●市役所の会議室（空室利用）に編集委員が集まる。来月号の全体構想について話し合う。それぞれ分担する写真については、市内の小・中学校を平均に紹介できるように記録をもとに次を決める。教育随想の依頼については特に慎重にする。それか

ら、「おしらせ」は、市教委で担当し、後日、教育史の参考になるよう心掛ける。……こんなことが主なことではなかったかと思えます。

●写真やカットのことで時間がなく山田（利）先生宅が近いので、そのまま編集室を移動して、夜遅くまで編集を続けたものです。

――読者の反響はいかがでしたか。

●反応はそんなに敏感にはあらわれませんでしたね。むしろ教員以外の人々、市外の先生方から賞賛の言葉が返ってきました。

●無料配布は無関心なものかとも思いました。でも、執筆者や紹介された学校が次第に増すにしたがつて関心が高まり、希望や意見が伝わってきました。

――いろいろ苦勞があったと思えますが……。

●苦談というほどでもないですが、教育随想の原稿がなかなか集まらなくて、急に交替して早書きをお願いすることがあったりしてあわてたこともありました。忙しい人が多

回想

小史



(創刊号より)

昭和四十八年度

- 養護教諭・養護婦が全校に配置されて、市の保健教育一段と充実する 4・3
- 月報「岡崎の教育」創刊 6・1
- 中学校生徒会の河川美化総決起大会 6・2
- 異常渇水により第一次給水制限、プール開きに待たががかかる 6・16
- 緑化都市宣言、緑化センターがオープン 7・1
- 視聴覚ライブラリー、図書館へ移転する 8・11
- 生徒会模擬議会、この年から始まる 10・20
- 第一回「岡崎のハーモニー」 11・17
- 教職員体育大会復活、珍プレー続出 11・24
- 第一回教育文化賞受賞式 11・24
- 石油不足で自家用車族大あわて、諸物価異常高騰する
- 中国青年使節団来訪 2・2
- 東部給食センター完工する 3・15

昭和四十九年度

- 「ふるさとのうた」「寸言」連載始まる
- 新任教員研修会、78名大いにはり切る 4・24
- 小学校全校にVTR設置
- 学校緑化推進委員会発足、さし木の実技講習会を手はじめに活動を開始する 6・4
- よみがえった菅生川にみかちゃん放流 7・14



いので前々から原稿を依頼しておいて、集まってきたものを手許に置いておくようにするといひです。それから、一ページの写真の季節感がなかなか出なくて、俳句の勉強をしたらと笑い合ったものです。

●座談会、○放談といひたものはどうしてもページが足りなかつたですね。作りものになってしまう。写真は楽しいが、ますますページを食う。やはり、レイアウトが一番難しいですね。集まってくる原稿をみて「先生の作文は、あまりほめられない」と笑い合ったものでした。

とくに印象に残っていることがあつたらお聞かせください。

●五十年八月号の「私の終戦」の取材のため、当時矢作南小学校に勤務されていた柴田信一校長を訪問しました。先生は、二十七歳のとき、外地教員派遣として満州に渡り、蒙開拓民の子弟を担当されたことを知りました。思い出のノートを開きながらこわばる口元から押し出される先生の話は、あまりにも悲惨すぎました。ついお言葉に甘えて、三度も訪問してお話をうかがうことになってしまいました。

●「いまはむかし」の取材訪問は緊張しました。でも、貴重なことを学ぶことができました。多くの先生方が語る体験は、そのまま「岡崎の教育」であると思ひました。

●取材のための下調べも大変でした。題が決まると、その都度、職場の先生を悩ませては、話題の素材をつかもうとしたものです。さらに、「教育史要」を調べたり、学校沿革史を見せたいだいたりして、年表づくりに励んだこともありました。今、読み返してみると、その行間に先生方が熱っぽく語られた話が数々思い出されてきますね。

では、おしまいにこれからの月報についてご意見をお聞かせください。

●やはり読者の関心を高めることが第一だと思ひます。読者とともにつくる月報「岡崎の教育」でありたいですね。そのために、読者の声を聞くためのモニター制をとるのもよいのではないのでしょうか。また、例えば、青年教師向けの特集を組むこともいいと思ひます。

●例えば、写真構成による特集はともいいと思ひますが、同時に新鮮味にも欠けてきたことも事実です。百号を節にして、特集だけでなく全体の編集について検討し直すことも必要ですね。

- 小学校球技大会この年から始まる 7・22
- 明日の岡崎の教育と文化を考える「岡崎教育文化大学」行われる。翌年より「岡崎市民大学」と改称
- 全日本道徳教育全国大会 11・1
- この年、開市四五〇年、各種の記念事業行われる
- 第一回「技術・家庭科作品展」 11・19
- 自然の中で遊びをとりもどす「岡崎子ども祭り」この年から始まる 11・23
- 第一回「岡崎市PTA文化展」 11・23
- 実践人冬期研修会、県野外教育センターで始まる 11・25

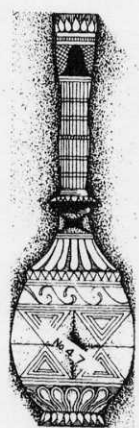
昭和五十年度

「ふるさとのうた」に代わり「ふるさとの自然」連載始まる

- 緑丘小学校開校 4・1
- 現職教育に給食部会発足する
- 岡崎っ子カナダへ、ウイニペク市親善訪問使節団出発 5・27
- 南公園の交通指導教室始まる 6・9
- 「点」の連載、八月号より
- 少年自然の家建築工事始まる

昭和五十一年度

「かがみ」「いまはむかし」に代わり「三面鏡」「教育日々」の連載始まる。「寸言」は「けしこむ」



(56号より)

余話

●足で書く

「いまはむかし」の取材をした時のこと。この記事はすべて足で書く。聞き書きである。大体訪問するのは夜。家をまちがえたり犬にほえられたり、車がミソにはまったりでまず失敗。やつとさがしあてた家が不在のこともあった。

さて、話はおもしろい。本編そっちのけでウラ話のまたウラ話まで。人間、夜おそくなるとウラ話がしたくなったり聞きたくなったりするもの。

しかし、これは公表するわけにはいかない。集めた記事も、十分の一くらいしかものにならないが……。

●乙川をカヌーで下る

「岡崎再見」シリーズNo.8。いつも上から見下ろしている川を、流れにそって川面から見てみようと、乙川を下った時のこと。雨ががりの上流は茶色の水が大きな石にぶつかって白く泡だっていた。カヌーで下るには絶好と判断したが、一日がかりで岡崎を通り抜ける間に何度岩にたたきつけられたことか。いつか腰に

痛みを覚えたが、同行のレポーターの手前、中止するわけにもいかず。一晚寝れば治ると思つて寝たが朝、腰に手をあてると飛びあがるほど痛い。医者へ行く。レントゲン写真に、折れて一センチも脊椎から離れている三本の骨が白く見える。カヌーで骨折したからと学校を休むわけにもいかず、昼間は、ギブスでギリギリしぼりあげ、帰宅すると、石膏で作った寝型で安静にするという日が続いた。文字通り骨の折れた決死のレポートであった。今だから言えるが全治三ヶ月、絶対安静の診断であった。

●蛇枕石の反省

（しなせきいし）

辰年の「点」は、蛇枕石でいこうということになった。福岡町は、当時、私の守備範囲。カメラを手に出かけたが、今は私有地の一角。四方をうめたてられ沼地となつたところから上からゴミをかぶせられみじめな姿。何時間もかかってゴミを取りのぞき、型を整え写真を撮り、資料を調べ、記事を書いた。写真からはゴミの中に沈んでいる姿は連想できないできばえであった。その後、いくつかの大きな会社から「社内報の見出しに使いたいから」と、問い合わせがあったが、社内報のトップにゴミの山をのせるわけにもいかず、蛇枕石トップをかざつたという話はそ

の後聞いていない。どの会社も、辰年という年にちなんで仮空の竜をいかに紙面に登場させるかで編集者は頭を悩ませていたらしい。

●数の中

「海月佐五介」の墓が藪の中にあると聞いた。陽が入らず、うす暗い藪の中をあちらこちらと歩く。用心して長袖を着ていたが、首すじや顔を容赦なく蚊が襲う。頭と顔にはべつとりとくもの巢。真夏の竹藪は風が通らず身体は汗ばんでいるのだが、首すじはいやに悪感が走る。ようやくやくみつけた墓は五輪がくずれ落ち、「助けてくれえ」と叫んでいるようであった。

——年代別読書欄バスター——

	20代	30代	40以上
1	表紙	1 教育日々	1 教育随想
2	海外ふれこ	2 教育随想	2 ふるさと山阿
	教育日々	3 ふるさと山阿	3 教育日々



積み直してやろうと石に手をかけたが……。夕闇せまる藪の中はますます暗く、蚊は一斉に攻撃してくる。たまたま、写真だけバチバチ撮って一度手を合わせてただけで飛び出してきた。藪の外はまだ西陽が輝き、目があけられないほどまぶしかった。

● 大門小学校、竜美丘小学校開校 4・3

● 現職教育に教育工学部会発足 市制施行六十周年記念式典、市民憲章制定はじめ多彩な記念行事が開かれる 7・1

● 岡崎市体育館竣工 竜美丘小学校校舎完工・開校記念式行われる

● ソニー理科教育全国大会、岡崎市で

● 山岡荘八氏来る、記念講演に聴衆多数

● この年、文化祭・学芸会に郷土劇の創作・上演が盛んに行われる

● 海外研修報告会、この年から

● 昭和五十二年度 「三面鏡」が「某校某日」「けしこむ」が「オアシス」になる

● 城南小学校開校 「少年自然の家」オープン 5・10

● 「子どもまつり」の運営を市民自主団体にバトンタッチする 4・3

● 岡崎市史の編さん事業始まる 6・22

● ソ連パレーホルチーム来る 7・3

● 全国放送研究大会、城北中連尺小を会場にして盛会 10・12

● 新学制施行三十周年記念式典行う。西堀栄三郎氏が記念講演 11・16

● 全日本合唱教育研究会岡崎大会 11・23

● この年度、校舎の増改築工事多し、城南小学校始め七校、体育館二棟

● 冬季研修会、この年より少年自然の家で

● 昭和五十三年度 新任教員自主研修会、この年より三月二十七日から三日間、少年自然の家にて



●取材に半年

「しめなわ」を取り上げた時は、材料にする稲わらの青刈りの様子から写真を撮った。刈取りは七、八月。天日乾燥かパーナーによる熱乾燥。冬になつてのしめなわづくり本番まで息の長いものだった。

その他「打上げ花火」「矢を作る」「和ろうそく」など伝統的な職人芸職人氣質に触れることができ、いろいろ教えられることが多かった。

●インタビュ

インタビュには気を使う。直接会えない場合には、しかるべき人に紹介してもらつたり、一緒に行つてもらつたり。

「どうしても忙しくて書くことは」とことわられる。「そこをなんとか」と。じゃ、「話すことなら」

声

- 教育随想を興味深く読んでいます。いろいろな分野の方の執筆を希望します。
- 自然紹介が入り、幅広くなってきた。さらに視野を広げていってほしい。
- 「海外こぼれ話」も結構ですが、国内のこと(県外研修など)も入れてほしい。
- 図書紹介には内容も書き添えてほしい。
- 「岡崎再見」を続けて下さい。郷土の良さが再認識できました。
- 若い教師の指針となるように、現場教師の実践欄を充実させてほしい。
- 岡崎の教育界の先達者たちを取り上げ「人物シリーズ」を連載してはどうか。

で、しゃべってもらう。話に花が咲いてとどまる所を知らず。(机の下に録音機がかくしてある)自分の考えから、苦勞話、略歴、趣味のことまで話はひろがる。

さて、この話を録音をもどしてなんとかまとめ持参する。クレームがつく。またなおす。やつとパス。

●午前様

原稿が揃つていざ編集となつても字数の調整、写真の選択と知恵をしばり、議論百出。何とかまとめて最終チェックを終わると夜中の十二時。疲れた後の紅茶と雑談でほっと一息。

●ミスプリント

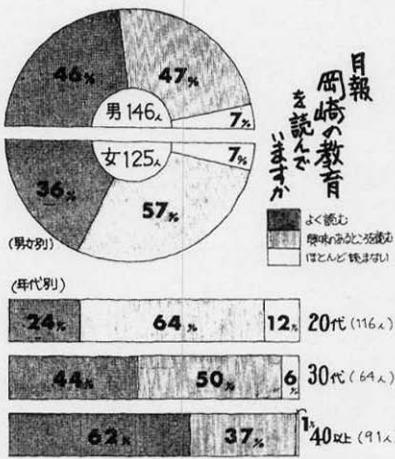
タタミのほこりとミスプリント。いくらでも出る。残念ながらこれが実感。和子が知子になるような例は多い。一番だいたい人名のミスプリ

ントは特に気をつけたいもの。あとから紙をはったことはないが写真で大きなミスをやり、あわてて刷り直したこともある。

●宿命

なんぎをして作ったもの。たった一枚の紙片でも手しおにかけたもの職員室のゴミ箱にあるのをこっそり拾つて保存する。(この気持ち、こういう仕事をした人でないとわからないのかなあと思う)でき上がつて机に配られる。チラシと目をやる。その瞬間が勝負。その時、読み手の目を引きつけなければなら、もう捨てられるおそれがある。なんぎして作ったもの。そのむざんな姿を見る。

こういう悲哀を感じるのは、編集の仕事にたずさわる者の宿命と云うが……。



- 市教委七階へ大移動、視聴覚ライブラリーも市役所へ引越しする。
- 中学校の運動部選手大量25名が全国大会に出場
- 岡崎教育史要Ⅲの編集始まる
- プラハ少年少女合唱団来演
- 西部給食センター完工、市内全小中学校がセンターの給食を食べるようになった
- 第一回「おかささままつり」盛大に
- 昭和五十四年度
「ふるさとの自然」に代わり「ふるさとの山河」
- 「某校某日」に代わり「海外こぼれ話」を連載
- 「太陽の城」完工、オープン
- 緑化日本一、八年間連続受賞
- 親善都市石垣市、福山市と児童生徒の相互訪問
- 世界の子どもの絵画展、太陽の城で
- ハンガリー少年少女合唱団(八月)に続き、ストックホルム少女合唱団来演
- 昭和五十五年度
中国小紅花芸術団公演、中日友好深まる
- チェゴスロバキア少年少女合唱団来演
- ウツデバラ市へ親善訪問
- 「岡崎教育史要Ⅲ」発刊
- 「ふるさとの自然」単行本として発刊する
- 昭和五十六年度
矢作北中学校新設開校 4・3
- 中学校のしし更新とアナライザー
- 新設三年計画で全校へ
- 「心の電話おかき」開設、〇七八三(オナヤミ)の方はぜひどうぞ
- 月報「岡崎の教育」百号となる



(74号より)

No.	表 題	号数
1	岡崎公園のいしぶみ	48
2	岡崎に帰って一座談会	50
3	岡崎公園の植物	51
4	切越をたずねて	52
5	道根住還を探る	53
6	南部の旧街道を訪ねて	54
7	三角点	60
8	乙川を下る その1	63
9	乙川を下る その2	64
10	石都岡崎	65
11	梵鐘	67
12	しめなわ	68
13	石垣	69
14	市内線今昔	73
15	打ち上げ花火	74
16	矢作川を下る	75
17	城址	78
18	矢を作る	80
19	八丁味噌	81
20	のぼり	84
21	ほたる今昔	85
22	和ろうそく	86
23	ちょうちん	87
24	大沼街道	88
25	二七市	91
26	鶏	92
27	鬼まつり	93
28	郡界川	97
29	かぶと虫	98
30	ぶどう狩り	99

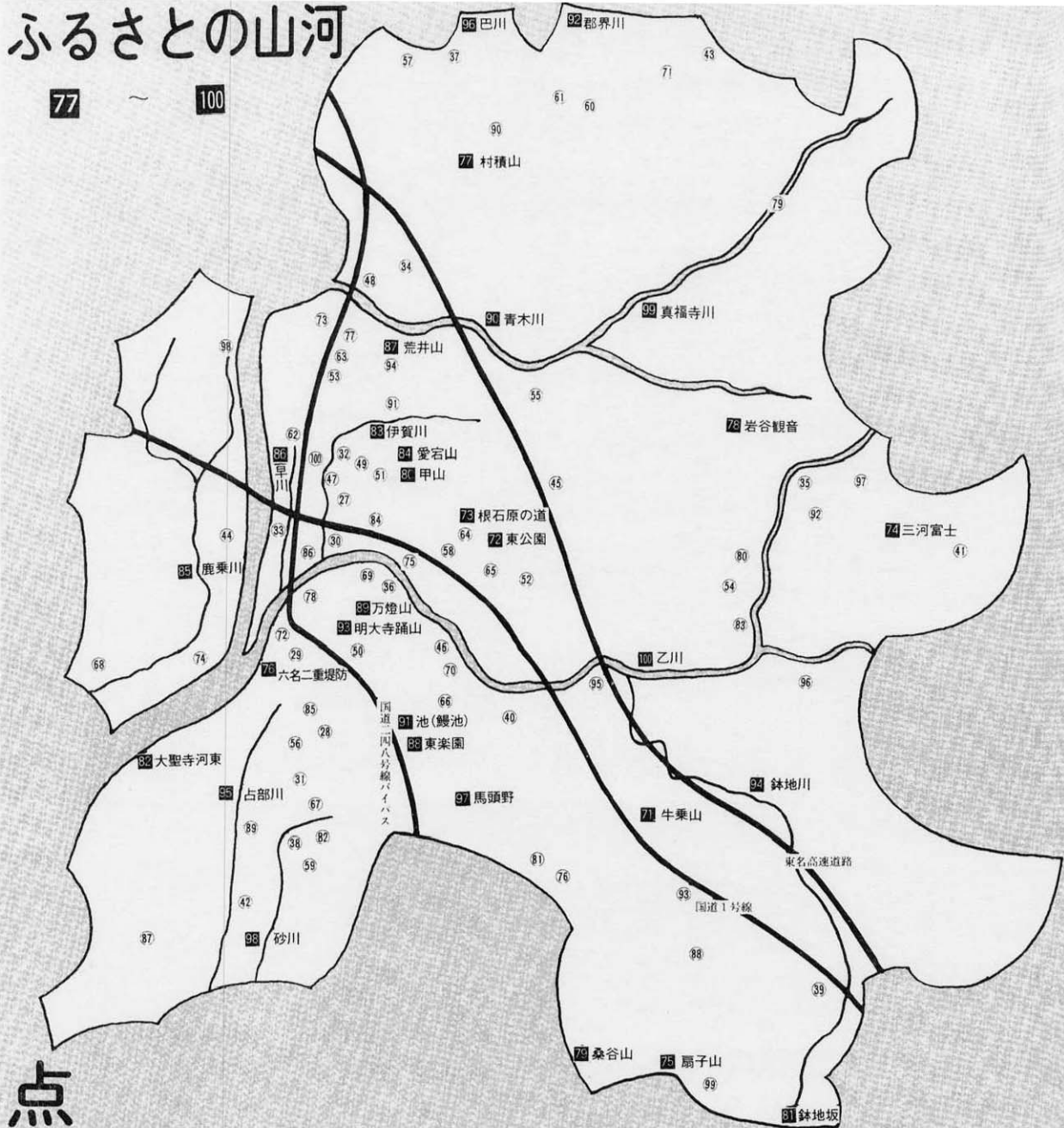
No.	寄稿者	表 題	No.	寄稿者	表 題	No.	寄稿者	表 題
1	後藤 金好	それ、そこに なにかが	36	石川 常子	0 点 の 教 育	71	鈴木 泉	頭を良くする法
2	兵藤 三平	病 友	37	星野 孝	名 松 下 二 年 間	72	仲井 豊	自然に親しむ 教育を
3	松野尾潮音	御 飯 を 頂 く	38	巴 一作	教 育 と 医 道	73	諸熊 盈子	K 子 の 留 学
4	清水 孝之	校 歌 と 公 害	39	酒井 榮吾	チ ョ ー ク と 黒 絵	74	小笠原健治	こんな先生に
5	山田 英世	古 典 を み な お す	40	大磯 義雄	セ ミ の あ わ れ	75	河口信一郎	現代教育に 持つ疑問
6	鈴木 幸生	パ ン ド ー ラ の 筐	41	矢田 香子	体 育 の 日	76	竹本 三郎	教師へのすこし 堅苦しい話
7	羽田 洋	育 て る	42	上原 欽二	還 暦 を 迎 え て	77	藤吉 慈海	信心ということ
8	鈴木 勝忠	小 心 非 礼	43	栗木 康男	明 日 を 思 う	78	杉原 丘南	山 人 放 談
9	梅田 章二	やさしくきびしく	44	内田 喜久	過 大 校 と 過 小 校	79	杉浦 豊	昔 を 偲 ん で
10	鈴木弥一郎	恩 愛 わ れ を 去 り ぬ	45	樋口 鐵巖	立 春 大 吉	80	前田 とみ	何かが 忘れられている
11	山本 甚一	一 生 を 貫 け る 趣 味 を	46	大須賀康弘	見 る 観 る 視 る 看 る 診 る	81	牧内 節雄	一球を 大切に する気持
12	平井 俊龍	行 解 相 応	47	鈴木 正弘	感 動	82	房宗 秀夫	人の性は元来善
13	田口 城一	ハ タ タ コ コ マ マ メ	48	佐々木静江	和 解 の 2 こ ろ	83	今井 柳三	岡崎よいとこ
14	伊藤四三九	抽 象 的 な 完 全 を 求 め た 頃	49	神谷 葵水	六 然	84	峰沢 佳行	思 い の ま ま
15	中沢 修	薬 師 信 仰	50	佐藤 玄彦	教 権 の 回 復	85	徳永 尚子	自信と謙虚さ
16	加藤 庄一	私 の 五 十 代	51	糟谷 正孝	百 日 草	86	牧野 卓朗	補導日記抜き書き
17	青山 光子	食 品 の 危 機	52	新行 紀一	古 文 書 断 想	87	中村 繁男	歴 史 の 周 辺
18	岡田 栄次	絵 筆 を と っ て 八 十 年	53	飯田 芳郎	正 義 感 と 公 教 育	88	相馬 駿量	患者と盆栽に 教えられて
19	沖田 千尋	現 代 の 都 会 の 子 ども の 教 育	54	荻須 正義	青 木 嘉 夫 を 凝 視 す る	89	永見 貞三	私 の 教 育 所 感
20	戸田 提山	賀 状 の 心	55	桑子 好次	教 育 雑 感	90	美濃部 栄	師 道
21	青木 章心	め ぐ り 合 い	56	井口 洋夫	科 学 す る 心	91	木保 達彦	自分で選んだ 苦難の道
22	小林 俊雄	正 直 な 岡 崎 市 民	57	桑原万寿太郎	行 動 の 合 鍵	92	浅田 蓬村	教 育 の 原 点
23	井上 友治	人 間 疎 外 と そ の 克 服	58	勝木 保次	岡 崎 市 に 住 ん で	93	都築孝太郎	自 然 に 還 る
24	竹内 清	生 き る こ と の 不 思 議 さ	59	新行 和子	逆 旅 の 文 人	94	杉浦 透	志賀重昂氏の一面
25	杉浦敦太郎	十 年 た っ て	60	木村 資生	才 能 と 教 育	95	小森 辰雄	感 動
26	加藤 正男	先 生 に 望 む	61	梅原 半二	学 習 の 非 可 逆 性 に つ い て	96	小谷野錦子	障 害 を 超 え て
27	松井 末好	季 節 と 人 の 心	62	詫間 晋平	OECD と 教 育 の 国 際 化 に つ い て	97	井上 恭夫	思 い つ く ま ま に
28	小林 一男	あ い さ つ	63	内籾 耕二	竜 美 ケ 丘 か ら	98	青山 米夫	偉 大 な る 思 き 出 岡 崎
29	加藤 明康	問 い 直 す	64	中澤 健次	自 ら の 師 た れ	99	永屋 省三	校 長 の 仕 事
30	杉浦 鉦典	先 手 教 師 と 後 手 弁 護 士	65	松井 貞雄	具 体 的 学 習 に つ い て	100	中根 鎮夫	ひ と を 育 て る も の

31	服部 敏郎	家庭教育と 学校教育	66	鈴木 煙郎	野 人 放 談
32	伊藤 郷平	画 竜 点 睛	67	早川久右エ門	アスペルギルス ハッチョウ
33	中西 光夫	韓国に 日本人村を訪う	68	蛭川 幸茂	生 命 力
34	藤井 實鷹	宗 教 的 情 操	69	大原準之助	尾鷲の自然 は大きい
35	沢田 秀一	ピグマリオン効果	70	木村 篤次	学校の 母性化に思う
36	石川 常子	0 点 の 教 育	71	鈴木 泉	頭を良くする法
37	星野 孝	名 松 下 二 年 間	72	仲井 豊	自然に親しむ 教育を
38	巴 一作	教 育 と 医 道	73	諸熊 盈子	K 子 の 留 学
39	酒井 榮吾	チ ョ ー ク と 黒 絵	74	小笠原健治	こんな先生に
40	大磯 義雄	セ ミ の あ わ れ	75	河口信一郎	現代教育に 持つ疑問
41	矢田 香子	体 育 の 日	76	竹本 三郎	教師へのすこし 堅苦しい話
42	上原 欽二	還 暦 を 迎 え て	77	藤吉 慈海	信心ということ
43	栗木 康男	明 日 を 思 う	78	杉原 丘南	山 人 放 談
44	内田 喜久	過 大 校 と 過 小 校	79	杉浦 豊	昔 を 偲 ん で
45	樋口 鐵巖	立 春 大 吉	80	前田 とみ	何かが 忘れられている
46	大須賀康弘	見 る 観 る 視 る 看 る 診 る	81	牧内 節雄	一球を 大切に する気持
47	鈴木 正弘	感 動	82	房宗 秀夫	人の性は元来善
48	佐々木静江	和 解 の 2 こ ろ	83	今井 柳三	岡崎よいとこ
49	神谷 葵水	六 然	84	峰沢 佳行	思 い の ま ま
50	佐藤 玄彦	教 権 の 回 復	85	徳永 尚子	自信と謙虚さ
51	糟谷 正孝	百 日 草	86	牧野 卓朗	補導日記抜き書き
52	新行 紀一	古 文 書 断 想	87	中村 繁男	歴 史 の 周 辺
53	飯田 芳郎	正 義 感 と 公 教 育	88	相馬 駿量	患者と盆栽に 教えられて
54	荻須 正義	青 木 嘉 夫 を 凝 視 す る	89	永見 貞三	私 の 教 育 所 感
55	桑子 好次	教 育 雑 感	90	美濃部 栄	師 道
56	井口 洋夫	科 学 す る 心	91	木保 達彦	自分で選んだ 苦難の道
57	桑原万寿太郎	行 動 の 合 鍵	92	浅田 蓬村	教 育 の 原 点
58	勝木 保次	岡 崎 市 に 住 ん で	93	都築孝太郎	自 然 に 還 る
59	新行 和子	逆 旅 の 文 人	94	杉浦 透	志賀重昂氏の一面
60	木村 資生	才 能 と 教 育	95	小森 辰雄	感 動
61	梅原 半二	学 習 の 非 可 逆 性 に つ い て	96	小谷野錦子	障 害 を 超 え て
62	詫間 晋平	OECD と 教 育 の 国 際 化 に つ い て	97	井上 恭夫	思 い つ く ま ま に
63	内籾 耕二	竜 美 ケ 丘 か ら	98	青山 米夫	偉 大 な る 思 き 出 岡 崎
64	中澤 健次	自 ら の 師 た れ	99	永屋 省三	校 長 の 仕 事
65	松井 貞雄	具 体 的 学 習 に つ い て	100	中根 鎮夫	ひ と を 育 て る も の

ふるさとの山河

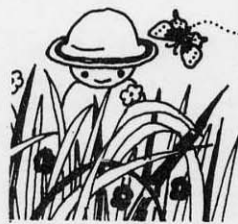
77 ~ 100

点



号数	表題	号数	表題
63	石川家成茶臼之碑	97	黍生の地蔵
62	富国の礎の碑	96	夜泣き地蔵尊
61	加藤翁碑	95	雄龍頭
60	奥殿温泉	94	徳本上人名号石
59	海月左五介塚	93	鳩ヶ窟碑
58	同楽句碑	92	金の奉納額
57	榎水の検問所	91	青年会相撲番付額
56	安藤恒夫先生頌徳碑	90	大給恒と墓地
55	万松寺道祖神	89	犬頭神社の狛犬
54	くびなし地蔵	88	羽栗の道標
53	大衆塚	87	「悠紀倉田跡」記念碑
52	改正碑	86	板屋町常夜燈
51	みよし燈籠	85	水準点
50	芦池橋	84	きらみち道標
49	唐弓弦	83	いばあらひ前「公德水」
48	本多平八郎忠勝出生の地	82	道路原標
47	藩校「尤文館」	81	松本窯跡
46	姫之塚	80	鏡岩
45	小呂の一本松	79	謎のいしぶみ
44	本多李喬句碑	78	明神渡船場跡
43	岩津発電所	77	極楽橋
42	思案橋	76	龍谷村電気購買組合碑
41	孝婦「とら」	75	高岩跡
40	石川数正の墓	74	渡里の大松
39	御硯水	73	味噌澤岩
38	じやまくら石	72	流転の鳥居
37	正観寺	71	煙火「熊野流」由来記
36	鯖大師	70	どんどん塚
35	自在竜神	69	穴観音
34	うそかえの神事	68	酒人神社
33	傍示石「従是東岡崎領」	67	太夫塚古墳
32	山車の龍	66	小豆坂合戦の碑
31	道標「すてんしよ」	65	築山御前の首塚
30	殉難烈死を讃える碑	64	経の巻菊水足付瓦
29	発句奉納額	63	築山御前の首塚
28	岡崎村道路元標	62	小豆坂合戦の碑
27	先生第一号	61	酒人神社
		60	穴観音
		59	どんどん塚
		58	味噌澤岩
		57	流転の鳥居
		56	煙火「熊野流」由来記
		55	山車の龍
		54	道標「すてんしよ」
		53	殉難烈死を讃える碑
		52	発句奉納額
		51	岡崎村道路元標
		50	先生第一号

教育日々



えん魔帳

愛宕小 長坂 信一

緑に包まれた愛宕の山に、この春、完成したばかりの新しい校舎。三階の六年一組の教室では、一時間目の国語の学習が始まるところだ。

準備を終えた子供達の目は、教卓の上に注がれている。

「先生、今日もまた例のものを広げてるぞ。」

実は、私の机の上には、日時と教科名を書いた座席表が四十枚ほどとじて置いてあるのだ。昨年二学期より始めた授業メモであるが、子供達いわく、「えん魔帳」と。

私にとっては、決して「えん魔帳」などというつもりはなかった。学習時間に個々の子供がどんな活動をしたか、具体的に

つかんで残しておく、また、板書事項や残された問題点などを書き込んでおき、授業の反省や発展への一方法とする。そして、高学年としての自覚を持ち、一時間の学習に真剣に取り組んでほしい。こうしたことをめあてに考えたものである。記入はいろいろだが、国語の授業を途中まで、私のつぶやきと記入例で追ってみる。

「何、Nはまだ国語の本が準備できてない。」(NX)

「巡視しながら、宿題を見て、「漢字の練習が途中までしかやってないのか。」(A宿△)

「それでは「文語は今でも生きていける」を読みなさい。」

挙手11名。Aに指名。家でよく練習してきたであろう。Aは大へんよく読めた。(A◎◎)

続いてAはKを指名。Kは声が小さく語尾が聞き取りにくい。

(K声小、語尾ぼけ)

Dは「ふるさと」を読む。歌ってみたらと声があり、Dは顔をまっ赤にして歌い終わる。(Dふるさと音程△)次はTが「おぼろ月夜」を歌う。うまいうまいとほめながら、(Tおぼろ月夜歌A)などとメモする。一通り読み終えたが、Sが「文語って何だかわからない」と言う。



さつそく(S文語とは)と記入し、後日の課題とした。

子供達にはこわいはずのえん魔帳だが、授業が終わると自分の発表について、担任の意見の求めにえん魔帳のぞきに来る。

そんな子供達の顔を見ながら、成長を楽しみにしている私である。

収穫作業での子供達

根石小 井上まさ子

「先生、きゅうりがこんなに大きくなったよ。」

「ほんとだ。でっかいなあ。」

「きゅうりってどれっ。」

「ほうら、H君、これよ。こんなに大きくなったでしょう。」

「こんな会話のやりとりから特

殊学級児童の農園作業学習が始まる。きょうは、収穫作業だ。わずか、十平方メートル足らずのミニ農園だが、きゅうり、トマト、ピーマン、トウモロコシ、かぼちゃ、なす、うり等、品種は多彩である。

当初、子供達は、ピーマンがどの木で、きゅうりはどれ、なすは? 何を聞いても、教えても、実のできないうちは、さっぱり区別がつかない。やがて、花が咲き、実をつけるようになって、だんだんわかってきた。

食卓に調理された野菜や台所で見るだけの子供達にとつては当然のことであろう。

「先生、なす、なす!」と大声をあげて、なすの存在を知らせてくれたH君は、学級の中でも、農園作業に関心を示さない子供の一人、

「H君、見つけたね。えらいなあ。」

他の子供達も、負けじと一生けんめい葉をかきわけた。

「あつた。あつた。」

つやつやした新鮮な、なすやピーマン、ミニトマトなどを切りとって歓声をあげている。

なすを見つけたH君に

「H君、これなんだつた?」

と聞くと、

「これは、なす。かぶと虫が食



べるの。栄養があるから。」

昆虫に全く興味を示さなかったH君が、いつの間にかかぶと虫も食べることを知っていた。

それに続いて、T君が

「かぶとは、きゅうりも食べる。」

と言いだした。次いで、本学級での虫博士M君が、

「そうだよ。かぶとやくわがたは、なすやきゅうりやすい

いかが大好きだよ。ぼく家ですつとるもん。あした持つてくる。」

と得意顔。話は、ますます脱線していく。しかし、こんな会話の中に純真な子供心がうかがえてほほえましい。

今後、作業学習の中で、作物を収穫する喜びを味わせると同時に、作物の世話をする過程も大事にし、喜んで仕事や作業をする態度を養っていきたい。



〔寄贈刊物・資料等〕

◆明日の岡崎を考える

第7集 B6判 二二二頁

◆脚下照顧 B5判 二四八頁

◆私たちの読書

岡崎市立恵田小学校校現

◆詩心の発見と創造をめざして

岡崎市立恵田小学校校現

◆読書の記録

岡崎市小中学校校務主任会

◆岡崎市民大学運営委員会

岡崎市立恵田小学校校現

◆職教育研究所

岡崎市立恵田小学校校現

晴れの全国大会へ

竜海中男子バレーほか

■全国中学校選抜競技大会出場

▽バレーボール

・男子：竜海

・女子：矢作

▽陸上競技

・男子

大原 満 (岩津) 三千里

明星光信 (附属) 百米H

・女子

佐野順子 (岩津) 一年百米

中間洋子 (矢作) 走幅跳

鳥居晶子 (矢作) 砲丸投

▽水泳競技

・男子

畔柳圭司 (甲山) 百・二百バタ

望月裕一 (竜海) 百米平

橋本光弘 (竜海) 百・二百平

平野康治 (矢作) 百平

■東海地区中学校体育大会出場

▽バレーボール

・男子：竜海

・女子：南・矢作

▽卓球

・男子：岡田岳二 (東海)

▽庭球

・女子：近藤・平松 (福岡)

▽剣道

・女子：織田・岡 (福岡)

▽陸上競技

・男子

井沢 晋 (甲山) 一年百米

水野 亨 (葵) 八百米

今井章夫 (葵) 走高跳

服部光幸 (城北) 三千里

■愛知県中学校総合体育大会

優勝者・優勝チーム

▽バレーボール

・男：竜海、女：矢作

▽陸上競技

・女子

佐野順子 (岩津) 一年百米

中間洋子 (矢作) 走高跳

▽水泳競技

・男子総合：竜海

畔柳圭司 (甲山) 二百バタ

望月裕一 (竜海) 百平

橋本光弘 (竜海) 二百平

八百米リレー (矢作)

●研究会・九月九日(水) 岩津小

案内・九月二十五日(金)六名小

●第34回 岡崎市中学校市長杯総合体育大会兼西三河中学校選手権大会岡崎・額田支所予選会 56.7.19 ~ 7.30

〈市長杯総合成績〉

種目	性	優勝	2位	3位
軟式野球	男	南	東	城北・葵
ソフトボール	女	幸田	城北	岩津
軟式庭球	男	矢作	六ツ美	竜海・城北
	女	福岡	南	矢作・附属
卓球	男	幸田	東	南・附属
	女	東	南	矢作・幸田
バレーボール	男	竜海	矢作	葵・幸田
	女	南	矢作	竜海・福岡
バスケットボール	男	葵	美	川岩津・六ツ美
	女	幸田	竜海	矢作・東海
ハンドボール	男	六ツ美	美	川葵・岩津
	女	美	川	城北・葵
剣道	男	葵	福岡	幸田・額田
	女	甲	山	南・岩津
体操	男	竜海	甲	山葵
	女	南	美	川海
水泳競技	男	矢作	美	竜海
	女	矢作	川	城北
柔道	男	美	川	葵
	女	矢作	葵	六ツ美
陸上競技	男	矢作	葵	竜海
	女	矢作	葵	竜海

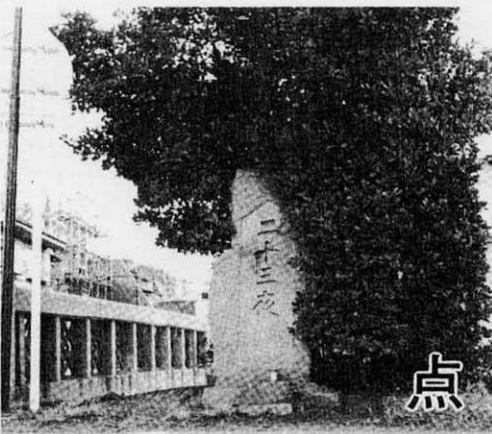
	1位	2位	3位	4位	5位	6位
男子総合	矢作	葵	竜海	南	六ツ美	岩津
女子総合	矢作	南	葵	東海	竜海	甲山
男女総合	矢作	葵	南	竜海	東海	六ツ美

- 第8回 岡崎市小学校球技大会
- 第20回 岡崎市小学校ソフトボール大会
- 第19回 岡崎市小学校水泳競技大会

〈成績〉

種目	性	優勝	2位	3位	位
バレーボール	男	竜美	六名	井田・三島	
	女	六名	城南	六ツ美中・六ツ美北	
バスケットボール	男	連尺	大樹寺	細川・岩津	
	女	愛福	岡細川	三島・井田	
サッカー	男	福	岡	岡崎・大樹寺	
	女	六名	城南	三島・矢作南	
ソフトボール	男	六名	城南	三島・矢作南	
	女	山	中田	愛岩	
水泳競技	男	井田	井田	常磐・根石	
	女	井田	井田	三島	

二十三夜碑



点

所在地——岡崎市城北町

二十三夜の代待や
門の通りはまだ四つ

二十三夜の月の出は深夜。米や酒、肴を持ち寄って月待ちをするのは、これと言って楽しみがなかった昔の人には格好の息抜の場であったと思われる。

元能見の観音寺前の、伊賀川にかかる神明橋西たもとに、立派な「二十三夜」の石碑が建っている。人の背丈より高く、下には「東ハ能見西ハ日名大門、南ハ康生矢作橋北ハ伊賀井田」と刻んである。講中の人が道しるべを兼ねて建てたものだろう。

裏面には大正十三年十一月と

記され発起人の名が列記されているが、この内の一人、大橋定という人が講の創始者である。もともと、この辺には月待ちの風習はないが、この大橋さんは茨木から当地へ養子に來た人で生まれ故郷で盛んだった月待ち講をこの地に持ち込んだという。「定さが始めよまいと言っただぞね。講の日には、男衆が寄ってけっこう楽しくやつとつたみたいだね。」と、夕涼みのおばあちゃんが話してくれた。

●カット 岩津中 清水祥明

この本を

- 心身症とその病像 渡辺 久雄他 4,800円
- 新口八丁手包丁 金子 信雄 980円
- 自分を生かす 大河内一男 600円
- ともしび 神谷 卓爾 2,000円
- 親と子の感動ある子育て学 佐野 豪 980円
- 知られざる古代 水谷 慶一 1,300円
- 光る壁画 吉村 昭 980円
- 読み書き話す 外山滋比古 980円
- 都市と交通 岡 並 木 380円
- 仏教名言108の知恵 松涛 弘道 950円

「岡崎の教育」百号、足かけ八年。

特集の「岡崎の教育」小史をまとめてみて、続けることの大切さを痛感。生み、続ける苦しみを語る先輩諸氏の話に現役の責任の重さを痛感。これからも、読んでもらえる月報を作るために骨身を惜まない覚悟。乞声援、乞ご協力。

オアシス

新学期が始まった。久しぶりに出会う顔、顔、顔。夏休みの後だといふのに青白い顔の子が多くて驚いた。そういえば、プール解放で泳ぎにくるのはほんの数名だった。最近の中学生は体を動かすことを好まないようだ。しかし、もうすぐ体育大会。みんな元気のよいところを見せてほしいものだ。

あつという間に過ぎ去ってしまった夏休み。今年こそは計画的にやろう。教研レポートも論文も……と思いつつ。やっぱり今年も期限切れ寸前、分刻みの勝負に突入してしまった。ついこのあいだ生徒たちに「今年こそは計画的にすごそう夏休み」と熱弁をふるっていた自分が、はじめに思えて仕方ない。

スイカのおいしい食べ方は、鼻の頭にも果汁がたっぷりにかぶりつき、種子をブツとふき出すこと。編集会議のおり、メロンを出して頂いた。その横には、スプーン。「では、さつそく……」ところが、力余って果肉は床に。チクショー。口惜しい。もう落とさ。メロンに、かぶりついた。